



万葉集事典

万葉集全訳注原文付 別巻

中西進編

〔編者〕中西 進 1929年東京都生まれ。東京大学文学部卒。文学博士。
現在筑波大学教授。著書、「万葉集の比較文学的研究」(読売文学賞)、同書
と「万葉史の研究」(学士院賞)、「山上憶良」、「万葉の世界」、「神々と人間」、
「柿本人麻呂」、「狂の精神史」ほか。

まんようしゅう じ てん
万葉集事典 万葉集 全訳注原文付 別巻

なかにしすすむ
中西 進編

© Susumu Nakanishi 1985



講談社文庫
定価980円

昭和60年12月15日第1刷発行

発行者——野間惟道

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話 東京(03)945-1111(大代表)

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社千曲堂

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料は小社負担にてお取替えます。(庫一)

ISBN4-06-183651-X (0)



講談社文庫

万葉集事典

万葉集 全訳注原文付 別巻

中西進 編

講談社

目次

各卷一覽

九

諸本解説

一九

諸本卷別存在一覽

三

諸本形成伝来図

四

研究史年表（近世以前）

六

研究文献一覽（明治以降）

六

校本・本文（六） 全注釈書（六三） 入門書（六三） 研究書（六四）

歌人論（六） 研究史・書誌（七） 特殊研究（七） 講座・辞

典・年表・索引など（七） 雑誌特集号及び定期刊行物（七）

万葉仮名一覽

七

活用表

一九

動詞（二〇） 助動詞活用表（二三） 形容詞活用表（二六）

母音交替

二七

用字法

二三

古代皇居・皇陵

二六

遣外使

二三

遣隋使（二三） 遣唐使（二三）

官吏任用試験制度

二六

古代寺院

二四〇

東西の市

二四二

主要食料

二四三

貢上食品

二四四

冠位制度変遷表

二四六

官位相当表

二四六

官制組織図

二五五

議政官一覧

二五五

官人給与及び帳内・資人・事力表

二五五

国名一覧

二六六

時刻表

一八

系図

一八

皇室系図1 (二八四) 皇室系図2 天智天皇 (二八五) 皇室系図3 天

武天皇 (二八六) 皇室系図4 天武天皇 (二八七) 藤原氏系図 (二八八)

蘇我氏系図 (二八九) 大伴氏系図 (二九〇)

人名解説

一九

動物植物一覧

二七

動物一覧 (二八八) 植物一覧 (三〇四)

年表

三三

地名解説

四二

地図

五二

畿内帝都図 (五二) 律令制下奈良朝の諸国・等級および五畿七

道界 (五三) 遣唐使コース／遣新羅使コース (五四) 平城京周

辺 (五五) 明日香周辺 (五六) 東国全図 (五七) 関東そのI (五

三) 関東そのII (五四) 北陸能登 (五五) 近畿へ北部へ (五六)

近畿へ南紀・伊勢へ (五八) 山陽・山陰そのI (五九) 山陽・山

陰そのⅡ（五二）
九州北部（五四）
山陽・山陰そのⅢ（五三）
九州全図（五三）

初句索引

執筆者一覧

おわりに

中西進
五三

五二

五五

万葉集事典

万葉集 全訳注原文付 別巻

各卷一覽

卷二 八五	卷一 一四	歌番号 卷
相聞	雑歌	部立
初期、白鳳期	初期、白鳳期 が主。平城期 (和銅五年まで)	時代
磐姫皇后 天智天皇 天 武天皇 藤原鎌足 鏡王 女 久米禪師 石川女郎 大来皇女 大津皇子 柿 本人麿	雄略天皇 舒明天皇 中 皇命 天智天皇 天武天 皇 持統天皇 額田王 柿本人麿 高市黒人 長 奥麿 山上憶良 麻統王 川島皇子 志貴皇子 長 皇子 長屋王	主な作者
短 長 53 3	短 長 68 16	歌体と歌数
150	84	
卷一・二を合わせて一まとまりの歌集の体をなし、両巻の部立構成が万葉集の基本の形。また年代的にも古い歌を伝える。相聞、挽歌共に背後に伝承が隠されていることが想像される。	天皇代ごとに標を掲げて歌を配列、卷二と共通。宮廷を中心とした祭式、儀礼、行幸、行事などに歌われた歌が中心。歌の場が公的であることが多い。 用字は表意表音文字併用、好字を用いる意識が強い。	特徴

卷三 三三 ～ 四三			三三 ～ 四三	
挽歌	譬喻歌	雑歌	挽歌	
初期、白鳳期、平城期、天平期（天平十六	同右	白鳳期、平城期、天平期（天平五年頃まで）	初期、白鳳期が主。平城期（靈龜元年まで）	
聖德太子 大津皇子 手持女王 丹生王 山前王 山部赤人 大伴旅人 大	紀皇女 沙弥満誓 笠女 郎 大伴駿河麿 大伴坂上郎女 大伴家持 藤原八束	柿本人麿 長奥麿 高市黒人 大伴旅人 山部赤人 山上憶良 笠金村 湯原王 弓削皇子 春日王 大伴坂上郎女	有間皇子 長奥麿 山上憶良 倭太后 額田王 高市皇子 持統天皇 大来皇女 穗積皇子 柿本人麿 笠金村	
長9	短25	短144 長14	短78 長16	
252				
歌人には前代を引き継ぐ奈良朝初めの宮廷歌人、赤人の登場を見る。また歌人ごとの歌群的な記載のあり方も見られる。 表意表音文字併用。			挽歌には人麿の名を不朽のものとした歌々を収める。 表意表音文字併用。	

卷六 九〇七	卷五 七九三 ～ 九〇六	卷四 四八四 ～ 七九三	
雑歌	雑歌	相聞	
平城期、天平 期（天平十六	平城期の最末 より天平期 （天平五年ま で）初め	初期、白鳳期、 平城期、天平 期（天平十六 年頃まで）を 網羅	年まで）を網 羅
笠金村 山部赤人 車持 千年 高橋虫鷹 山上憶 良 大伴旅人 大伴坂上	大伴旅人 山上憶良 藤 原房前 小野老 笠沙弥 大伴百代 吉田宜 三島 王 麻田陽春	額田王 鏡王女 柿本人 麿 吹黄刀自 大伴旅人 大伴坂上郎女 安貴王 門部王 高田女王 笠女 郎 笠金村 湯原王 大 伴家持 大伴坂上大嬢	伴坂上郎女 大伴家持 河辺宮人
長 27 短 132	長 10 短 104	長 7 短 301 旋 1	短 60
160	114	309	
年代順配列。卷一・三の雑歌を継 ぐ形で作られた巻。聖武朝のはじ まりから行幸、遊宴歌を集めた。	年代順配列。筑紫大宰府における 旅人、憶良の両歌人を中心とした 歌群。漢詩文の高い素養を身につ けた当時の文化人達の文芸的趣向 がしのばれる。漢詩二、書簡五、 文章一、序文十を収載。	卷二相聞歌以後の拾遺の一巻。年 代的には幅があるが神龜天平期の 歌が中心。特に家持と彼をめぐる 女性達との贈答歌が多い。 表意表音文字併用。	

一〇六七 ～	卷七 一〇六八 ～ 一四二七	卷八 一四二八 ～ 一六六三
雑歌	雑歌 譬喩歌 挽歌	春雑歌 春相聞 夏雑歌 夏相聞 秋雑歌 秋相聞 冬雑歌 冬相聞
年頃まで)	年代不明 白鳳期、平 城期か	初期、白鳳期、 平城期、天平 期(天平十五、 六年頃まで)
郎女 湯原王 市原王 大伴家持 田辺福麿歌集	作者不明 柿本人麻呂歌集 古集・古歌集	舒明天皇 志貴皇子 鏡 王女 穗積皇子 山部赤 人 湯原王 市原王 弓 削皇子 広瀬王 笠金村 笠女郎 大原今城 大伴 坂上郎女 大伴家持
旋 1	短 203 旋 25	短 107 旋 1
246	350	246
当代の宮廷歌人の系譜が見られる。 表意表音文字併用。	先立つ六巻に對して、作者名の伝 わらぬ歌を集めた巻。体裁は卷三 と同じ。以上七巻が第一部万葉集。 作歌年代は不明だが先の六巻と重 なると思われる。分類は雑歌は詠 物、譬喩歌は寄物の題による。 表意表音文字併用。	四季に分類し各季を雑歌と相聞と に分かつ。新しい文学意識による 分類法。季節分類法の先蹤。各部 ほぼ年代順配列。作歌年代の幅は 広いが天平年間の歌が多い。 表意表音文字併用。

	卷九 一六四 ～ 一八二		
春雑歌	挽歌	相聞	雑歌
	白鳳期、平城期、天平期(天平十五年頃まで)	白鳳期、平城期、天平期(天平五年まで)	初期、白鳳期、平城期
作者不明	柿本人麻呂歌集 田辺福麻呂歌集 高橋虫麻呂歌集	柿本人麻呂歌集 高橋虫麻呂歌集 田辺福麻呂歌集 笠金村 播磨娘子 遺唐使母	柿本人麻呂歌集 高橋虫麻呂歌集 (姓名の簡略表記多し)
	短 長 12 5	短 長 24 5	旋 短 長 1 89 12
	148		
季節による分類は巻八に同じ。作	三大部立を完備した巻。各部はほぼ年代順配列。各個人歌集をそのままとり込んで成ったと思われる一卷。 雑歌、相聞では行幸途上、皇子達への献歌が多く見られる。挽歌には、地方の伝説に取材した虫鷹歌に特色が見られる。 表意表音文字併用。		

卷十 一八三 ～ 二三五	卷十一 二三五 ～ 二四〇	卷十二 二四〇 ～ 二五二
春相聞 夏雑歌 夏相聞 秋雑歌 秋相聞 冬雑歌 冬相聞	旋頭歌 正述心緒 寄物陳思 問答 正述心緒 寄物陳思 問答 譬喻	正述心緒 寄物陳思 正述心緒
年代不明 平城期、天 平期（中頃 まで）か	年代不明 天平期か	
柿本人麻呂歌集 古歌集	作者不明 柿本人麻呂歌集 古歌集	作者不明 柿本人麻呂歌集
長 3 短 532 旋 4	短 480 旋 17	
539	497	
者不明のものを集めた。歌の表現、内容は新しい時代を思わせる。古今集に接近した歌が多い。表意表音文字併用、戯書あり。	目録に「古今相聞往来謠類之上」とある。卷十二と一組の如く扱われるが、重出歌（四首）や部立、寄物の配列などから同時の編纂ではないと思われる。人麻呂歌集と然らざるものとを区別する。人麻呂歌集に簡略な表記が見られる。表意表音文字併用、戯書あり。	目録に「古今相聞往来謠類之下」とある。部立に羈旅発思をとり立てている。よってそれ以下の悲別

三三六 卷十四	三三七 卷十三	三三〇 二八二
雑歌 東歌 相聞歌 譬喩歌	雑歌 相聞歌 問答歌 譬喩歌 挽歌	寄物陳思 問答歌 羈旅発思 悲別歌 問答歌
年代不明 天平期、および天平期以降の時代の歌か	年代不明	年代不明 天平期か
作者不明(国名判明の歌) (遠江・駿河・伊豆・相模・武蔵・上総・下総・常陸・信濃・上野・下野・陸奥)	作者不明 柿本人麻呂歌集	
短 95	長 短 旋 66 60 1	短 383
238	127	383
「東謠」はこの巻の総題、国名判明歌には雑歌の部立があったと思われる。東国民謡を集めたものといわれるが全て短歌形式に整っている故、やや疑問。素材、表現には古今集に近いものがある。 東国方言が見られる。	長歌集、独立した短歌なし。宮廷に伝えられた詞章を集めたものか。地名に対する強い関心が編纂方法に働いている。 表意表音文字併用、戯書あり。	歌、問答歌は旅の情況における場合のもの。 人麻呂歌集に簡略な表記あり。 表意表音文字併用、戯書あり。